

目次

序……………久松 潜一

研究篇

源氏物語における浪漫的精神……………森岡 常夫……………三

帚木の冒頭をめぐって……………石田 穰二……………三

——あるいは帚木と若紫——

源氏物語と同時代和歌との交渉……………寺本 直彦……………六

——和泉式部の歌の場合——

異端の爪あと……………稲賀 敬二……………一七

——「源氏肝要」が肝要としたもの——

平安女流文学の美意識……………根来 司……………三三

——源氏物語と枕草子——

「春はあけぼの」の段の解釈と鑑賞……………楠 道隆……………一五

三卷本枕草子実録的章段の

史実年時と執筆年時の考証……………萩谷 朴……………一九

枕草子の組織構成について……………岸上 慎二……………二七

——現存諸本における——

資料篇

安養尼本

源氏物語古系図……………常磐井和子……………三三

〔越後在府日記〕〔ひろひ草〕所載

枕草子抜書……………稻賀 敬二……………三五

研究篇

源氏物語における浪漫的精神をここで考察するのであるが、浪漫的精神という語は、いかなる範囲の精神を意味するかを、まず明確にしておきたいと思う。それは現実性や日常性に集中する心とは、反対のものである。それは人間性を否定するものではないが、しかし人間の動物的本能や衝動を遙かに越えるものである。それは精神的なものや理想的なものとは結びつくことになる。従つてその世界は、浮世離れた非地上的な傾向、浄化された高貴な性格を伴うのである。そこに遙かなものをおこがれ慕う心、現実を越える夢見心地が生ずるのは、当然である。それは見知らぬ世界に引かれて行く心ともなるであろう。そしてそれは日常茶飯のことではないのであるから、しばしば思いがけない、不思議なあるいは神秘的な感を伴うことになるのである。

源氏物語の作者紫式部は、現実性を見落す人ではなかったが、しかしそこに立脚しながら浪漫的な思いを歌い上げているのである。そしていかなる時代においても、人々は現実を見つめる心とともに現実を越える心を有している。そのいづれが強調されるかは、作者により時代によって異なるが、浪漫的精神が人間の心の一面を代表するものであることは自明である。

## 二

源氏物語の「いづれの御時にか」という桐壺の巻頭の句は、周知のごとく伊勢集の冒頭の句を踏襲したものであるが、これは現代ではなく、昔の世界であることを意味するのである。更に最後の夢浮橋の巻は「とぞ」(異本「とぞ本に待るめる」)で結ばれているし、その他の巻にも伝聞をあらわすことばで結ばれているものがある。かように作者が伝誦者の立場に立つことは、物語本来の形式であるが、これは単なる形式だけではなく、物語の本質的精神に結びつくのである。す